

水土里レポート 投稿様式

投稿月日	平成28年11月25日
タイトル	疏水フォーラムin道前道後用水2016へ参加しました！
水土里レポーター名	水土里ネット福山 佐々田 愛

平成28年11月9日、10日にかけて愛媛県松山市において「疏水フォーラムin道前道後用水～水は大地を潤し、豊かな恵みと文化・風土を育む！未来につなげ、「虹の用水」～」が開催され、昨年の倉敷に続いて参加しました。

疏水は、農業用水だけでなく生活用水などに利用し地域住民の憩いの場や動植物の生育空間となるなど多目的機能を発揮しており、農業者のみならず国民共有の貴重な財産であることから広く国民に周知し疏水を将来に引き継いでいくことができるよう情報交換、情報発信等を行うことを目的に開催されています。

9日は松山市民会館で約500名が集まり基調講演、事例報告やパネルディスカッション等が行われました。



興味深い説明を熱心に聞きました！

会場も一体となって盛り上がりました！

基調講演では「新たな農業に向けたこれからの疏水について」と題し、農林水産省農村振興局整備部水資源課長の塩屋俊一氏が講演されました。

2010年に国の農業農村整備事業予算が大幅に削減されたことで、土地改良事業が新たな事業施行や施設更新から施設保全へと変わってきた。一方で新たな農業政策により大規模化、高収益化など単なる施設長寿命化ではなく、農業を産業として価値を高めることが必要であると講演されました。

またパネルディスカッションでは、農村で農業用水路を管理することは農業者の減少・高齢化で危機的な状況となっており、今までと違う仕組みが必要となっている。農業と直接関係のない市民の協力が不可欠となるため疏水が地域に役立つものであると発信し理解を得ること必要だと話されました。

特に印象に残っているのは「疏水という先人が脈々と築いた財産に付加価値を付けて次世代に引き継ぐ。」という言葉で、水土里ネット福山でも何百年も前から整備され管理を行ってきた疏水などの土地改良施設を今までどおり守りこれからも継続させる。そして多くの人にその重要性を発信していくことが大切だと思いました。

2日目の10日は、現地研修として志河川ダムや松山市考古館古照遺跡などを視察いたしました。

9日の事例報告で『「愚公移山」虹の用水は山並みを越えて』と題し、水土里ネット道後平野事務局次長の朝山和孝氏よりお話された中で、従来高知県側に流れていた河川の用水を堰き止め四国山地を掘削して道前道後へ用水を導かれた事をお聞きし、そのスケールの大きさと事業を成し遂げられた先人の実行力に感動しました。そしてこの面河ダムの非かんがい期となる冬期の用水確保のため志河川ダムが建設されたとお聞きしました。

志河川ダムまでバスで移動しましたが、愛媛の自然の山々は急峻な地形で工事施工のご苦勞を思いました。志河川ダムでは自然にも配慮された施設や水力発電の施設を視察しました。堤体の下から見上げたダムは迫力満点で放水から水しぶきが上がり霧雨のように降っていて圧倒されました。



最後に松山市考古館古照遺跡を視察しました。古照遺跡は昭和42年、松山市南江戸町にある下水道中央処理場の建設工事中に発見された古墳時代前期に機能した農業かんがい用の堰で、川の水位をあげて周囲の水田に水を引くためのものと考えられているそうです。

発見された3基の堰は木組みでできており、おそらく洪水でそのままの形で埋まったものが長い間水に浸かっていたため朽ちることなく当時の形を保っていたようです。堰には高床式倉庫の柱部材をリサイクルされており、これを元に高床式倉庫が復元されていました。

発見された木材を特殊加工し完全に復元された展示物を見て、古墳時代に水田に水を引くためにこんな高度技術があったことに驚きました。古照遺跡が当時のまま発見されたことが奇跡だと思います。



今回の疏水フォーラムでは、古墳時代のかんがい用堰から戦後の大事業、そして松山市らしい「水」にまつわる俳句を取り上げられました。いつの時代も用水は人々の生活と密着していたことを知り、改めて疏水の素晴らしさを実感しました。

水土里ネット福山は、21世紀土地改良区創造運動を通じて疏水の豊かさ、重要性をこれからも発信してまいります。